昔みたい

田中康夫

Being in a Past by Yasuo Tanaka

新潮文庫

昔みたい（むかし）

新潮文庫　　た－33－5

平成元年八月二十五日　発行
平成四年八月二十日　八刷

著者　田中康夫（たなかやすお）

発行者　佐藤亮一

発行所　株式会社　新潮社

郵便番号　一六二
東京都新宿区矢来町七一
電話　営業部（〇三）三二六六－五一一一
編集部（〇三）三二六六－五四四〇
振替　東京四－八〇八番

価格はカバーに表示してあります。

乱丁・落丁本は、ご面倒ですが小社読者係宛ご送付ください。送料小社負担にてお取替えいたします。

印刷・二光印刷株式会社　製本・株式会社植木製本所

© Yasuo Tanaka 1987　Printed in Japan

新潮文庫

昔みたい

田中康夫著

新潮社版

4309

昔みたい ◆ 目次

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

芦屋市　平田町　9
ヴェネチア　サン・ミケーレ島　27
品川区　島津山　49
大井埠頭　69
世田谷区　深沢八丁目　91
伊豆山　蓬莱旅館　111
フランクフルト　ホテル・ケンピンスキー　137
神戸市　花隈町　157
名古屋市　八事　175

パリ　ホテル・ル・ブリストル　195
千代田区　三番町　213
港区　伊皿子坂　231
軽井沢　千ヶ滝西区　251
台東区　浅草柳橋　271
昔みたい　291
あとがき　311

田中康夫の「文体」　川村　湊

昔みたい

芦屋市 平田町

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

「さゆり、お電話よ」
母の声がした。
「はあい」
庭の芝生に水をあげていた私は、ホースを下に置いた。そうして、少し離れたところにあった水道のカランをまわした。
母は、広縁のところに立っていた。地味な柄のワンピースを着ている。もう、六十歳近い。歳よりは若く見えるけれども、それでもやっぱり、だ。「ママ、もっと、派手なパターンのお洋服を着ればいいのに」時々、アドバイスをした。
若いうちは、かえって普通な服装の方が綺麗に見えるのだ。普通のデザインで、地味な色合いの。自慢じゃないけれど、大学を卒業して三年経った今でも、インディゴ・ブルーのマドラス・チェックのボタン・ダウン・シャツを亜麻色のコットン・パンツと合わせて着ることがある。上には紺青色したクルー・ネックのサマー・セーターを被る。

ポニーテールが良く似合う女の子のようなファッション。けれども、こうした時の私は自分でもびっくりするくらいに、キラキラしている。母を助手席に乗せて岩園町にあるスーパーいかりまで私の運転でお出かけしたりした時に、店内の鏡に映った自分を見るとそう思った。

もっとも、母のような年齢になると、話は別だ。むしろ、若過ぎると思われるくらいのデザインと柄の方が、いいように思える。たとえば、ヨーロッパへ出かけると、年老いた婦人がゆっくりとした歩調を取りながら、けれども、着ているワンピースは驚くほどにハデであるケースを、しばしば、見かける。

どうして、日本の女性は歳と共に、おとなしい服装になっていくのだろう。

「誰から？」

私は尋ねた。サンダルを突っ掛けていた。そのサンダルはもちろんのこと、そして、ストッキングもソックスも履いていない私の両足も、少し濡れていた。このまま、上がるわけにもいかないしな、どうしよう。考えた。

「東京の方みたいよ」

じゃあ、急がなくては。濡れた足の問題よりも、むしろ、そっちの方がプライオリティの高いことのような気がした。

「女の子？」

大学時代の友だちかも知れない。私は宝塚市にあるミッション系の女子高を卒業すると、同じ修道会が設立した東京の女子大へ進学した。その時の友だちだろうか。けれども、母は電話をかけてきたのは男性であることを教えてくれた。

「何てお名まえの人？」

一体、誰だろう。少し、心臓の鼓動が早くなったような気がした。多分、今年の末までには正式に婚約をするであろうステディな男性がいる私にも、男の人から電話がかかってくることは、もちろんある。

けれども、彼らは昔からの友だちばかりだった。私は小学校だけは、西宮市の甲東園にある共学の私立学校に通っていた。その頃からの友だちだ。もちろん、みな大学を既に卒業している。家の商売を手伝っていたり、サラリーマンになっていたり、あるいは、今年から医師になっていたり。親同士も良く知っている子たちだった。

東京に暮らしていた時代に付き合っていた男の人たちとは、今はもう、コンタクトを取っていなかった。芦屋の自宅の電話番号を知っている人は何人もいた。けれども、かかって来ることはなかった。

あの頃の出来事は、秘密の引き出しにひとつずつ、仕舞い込まれているのだと思っていた。今でも時々、夜、ベッドの中で眠りにつく前、思い出すことはある。けれども、そうしたセピア色した昔のシーンは、知らない間にフッと浮かんでくるだけのことだった。

意識して思い出そうとしていたわけじゃない。だから、秘密の引き出しが一体、どこにあるのか、私自身は知らなかった。もちろん、調べてみれば、すぐに在処はわかるはずだ。でも、調べてみようとは思わなかった。

「滝本さんって、おっしゃる方よ」

母は、相手の名まえを告げた。瞬間、キューッとお腹が締めつけられるような感じになった。中学生や高校生だった頃、中間試験や期末試験の答案が返される前に感じたのと同じ緊張だ。

「では、これから、答案を返却します。平均点は、62・7点。いつもよりも、低かったね」先生が、たとえば、そんなことを言った後、一人一人の名まえを呼ぶと、教壇のところまで取りに行く。私の一番苦手な時間だった。

試験を受けた時の手ごたえで、ある程度の出来不出来は予想がつくものだ。けれども、その具合には関係なく、いつでも、お腹がキューッと締めつけられるような感じになった。

私は指を折り曲げると、両手ともそれぞれ、握りこぶしを作った。ジェットコースターに乗ると誰もがするように、ギュッと足を踏ん張った。

もっとも、真剣な顔付きでそんなことをしていたら、みんなから不気味に思われちゃう。友だちは多いに越したことはなかった。だから、わざと貧乏揺すりもして、「ヒエーッ、どうしよう」ひょうきんな声を出した。笑われることもあったけれど、でも、それで、「変わ

ってるわね、さゆりって」と言われる心配は少なくなった。
「あー、滝本さんか」
ごくごく普通の声を出そうとした。
「久しぶりだなあ、なつかしい」
黙っていると、母に何か言われそうな気がして、それで、言葉を続けた。けれども、
「早く、出た方がいいわよ、さゆり」
母は、電話の相手については何も聞かずに、ただ、そう言った。彼の声を聞けば、中年であることくらい、わかるはずだ。自分の娘とどういう関係にある人物なのか、気にならないのだろうか？　不思議に思った。
「エヘヘ」
サンダルを脱ぎながら、まだ濡れている足の裏を片方ずつ、なんと、自分の掌で拭くと、広縁に上がった。母は、「まあ」という表情をした。
尋ねるのが、母は怖いのだろうか。電話の方へと向かいながら考えた。自分の掌で足の裏を拭いたのも、私の心の中を見透かされないようにという、その場で考えたフェイントだった。学生時代の、ひょうきんな声を上げながらの貧乏揺すりと同じ発想だ。
――でも、もしかしたら、母は何も疑っていないのかも知れないわ。滝本さんとの間の出来事など、想像することすら出来ないのかも知れないわ。

どうして急に電話をかけて来たのか、その理由のわからない私は、ただ、ドキドキしながら、居間へと入った。

もしも、私の記憶に間違いがないのならば、滝本さんは、今年、四十六歳になるはずだった。父親とまではいかないにせよ、でも、充分それに近い年齢だ。その彼と、私は大学時代に付き合っていた。

東京に出て来ると、寮に入った。もちろん、本当は一人で住んでみたかった。けれども、これまた、もちろん、世の親の常として、許してくれなかった。かなり粘ってみたのだけれど、駄目だった。

私の父は、化学会社を経営していた。といっても、世間で名まえが広く知られているわけではない。一応、株式市場にも上場している会社なのだけれど、でも、一般消費者が手にする製品を作ってはいなかった。それで、あまり、耳にすることのない会社だった。

「へえー、さゆりのパパの会社って、大きいんだね」従業員数や年商を知った友だちは、みな、一様に驚いた。それまでは、単なる町工場を経営しているのかしら、くらいにしか思っていなかったのだろう。でも、別に大きな会社を経営しているからって、それが私という一人の人間の評価に、直接、つながるわけではないものね。そう思っていた。

住んでいる家は、平田町にあった。あまり、芦屋について詳しくない人が聞いても、ピン

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com